

全学 FD/SD 研修会の開催報告 大学教育学会への参加を紹介

本号では、第2回全学FD/SD研修会の開催報告を中心に、
教育の質向上に向けた本学の取り組みを紹介します。

全学FD/SD研修会では、『「+オンデマンド授業等」をどうデザインするか～新たな授業形態での実践と工夫～』をテーマに、「+オンデマンド授業等」について、取り組み事例の共有や問題点、良かった点を振り返る機会にしました。また、当センターが参加した「大学教育学会」の様子と、教育支援研究開発センター企画委員会に学生が参加した様子、当センターのセンター長が講師を務めたアカデミックスキルセミナー「アカデミックスキルって何？」についても掲載しています。

教職員の「やってみたい！」を応援したい。 教育イノベーション・トライアル支援制度

..... 教育プログラム支援制度から、より使いやすい制度に

この制度は、先生方や職員の皆さんが『こんなことをやってみたい!』と思った教育の工夫やチャレンジを形にするためのサポート制度です。学部をこえた取り組みや、ちょっと試してみたい新しい授業の方法など、教育に関する様々な活動を応援します。

応募受付期間

受付終了

通常
募集

2025年12月1日～2026年1月31日

2回目
募集

2026年6月1日～2026年6月30日

※通常募集は受付を終了しています。2回目募集を2026年度春学期に予定しているため、改めてPOST等のお知らせをご確認ください。

応募方法や審査については、
募集要項を必ずチェック!



CONTENTS

P2 令和7年度第3回全学FD/SD研修会 開催
『「+オンデマンド授業等」をどうデザインするか
～新たな授業形態での実践と工夫～』

P3 教育支援研究開発センター企画委員会に
学生が参画

アカデミックスキルセミナー
「アカデミックスキルって何？」開催

P4 大学教育学会に参加・発表しました!
- 教員・職員がともに参加・発表した2025年度の取り組み -

「+オンデマンド授業等」をどうデザインするか ～新たな授業形態での実践と工夫～

導入説明：杉原 隆史 課長（教学センター）
話題提供：三田 貴 教授（教育支援研究開発センター副センター長 / 国際関係学部）
渡辺 達也 教授（理学部）・川根 公樹 准教授（生命科学部）



12月8日(月)、「2025(令和7)年度第3回全学FD/SD研修会」を開催し、対面で26名が参加しました。なお、後日講演部分のみオンデマンドで配信を行い、66名が視聴しました。第3回全学FD/SD研修会は、『「+オンデマンド授業等」をどうデザインするか～新たな授業形態での実践と工夫～』をテーマに教学センターからの導入説明と本学教員からの事例紹介、グループワークを通じて「+オンデマンド授業等」について、取り組み事例の共有や問題点、良かった点を振り返る機会としました。初めに、教学センター 杉原 隆史 課長が導入説明を行い、今年度からの「14週(対面)+90分相当オンデマンド」導入の経緯と運用上の整理事項を示されました。背景として、大学設置基準等の改正による学年暦の多様化や学内のBYOD環境整備を踏まえ、学修者本位の教育を促進する観点から導入した旨が述べられました。運用面では、オンデマンドの実施方法・配信期間・時間数をシラバスに明記し、視聴期間は少なくとも1週間、資料掲示+課題のみの代替は不可としていると説明されました。事前・事後学修は総時間で設計し、オンデマンド授業の分割配信やフィールドワーク等代替手段での実施も可能であると紹介がありました。

その後、国際関係学部 三田 貴 教授（教育支援研究開発センター副センター長）と理学部 渡辺 達也 教授、生命科学部 川根 公樹 准教授から事例紹介がありました。三田教授からは、必修英語や講義・演習での「+オンデマンド等」の活用事例が紹介されました。1年次は自己学習計画やレポート・プレゼンの基礎を共通動画化し、2年次演習はアカデミックライティングの基礎を共通提供。講義では事例導入や手法解説をテーマ別動画に整理し、対面はアウトプットに集中する設計です。動画作成の負担や公開時期、シラバス整合など運用課題も示されました。渡辺教授からは、理学部の実践として説明が長い単元や答案解説など高度・分量多めの内容をオンデマンド化し、対面は演習重視とする設計が示されました。動画を複数回に分ける工夫がある一方、学生の反応把握が難しい点が課題です。川根准教授からは、1年次必修「生物学通論A」でのJT生命誌研究館訪問をオンデマンド相当として位置付けた事例が共有されました。体験による興味喚起・理解定着がある一方、参加率や教員側の時間負担が課題です。その後のグループワークでは、「+オンデマンド授業等」について、取組事例の共有や良かった点、問題点等の振り返りを実施し、「小テスト・レポート解説や分量が多い、また高度な内容はオンデマンドへすると効果的。」「14回のどこに入れるかが課題。」「字幕・スクリプト等のアクセシビリティが重要。」など全体共有があり、最後に参加者個々の気づきを付箋に書いて共有しました。



参加した教職員の声

- ・ 講義以外の授業に関するオンデマンドの取り組み方を知ることができた。
- ・ オンデマンド授業の形態について、多様な形態で実施できる可能性について知ることができ、大変参考になった。
- ・ 動画作成や編集・配信の実際について知ることができた。

教育支援研究開発センター企画委員会に学生が参画

12月10日(水)、教育支援研究開発センター企画委員会にて、2026(令和8)年度全学FD/SD研修会のテーマ検討に学生の意見を反映させることを目的に、本学学生9名が参画しました。企画委員会は、全学FD/SD研修会の企画立案及び運営、授業手法の開発・改善の支援と推進、学生の主体的な学びを促進するための支援体制・環境整備などの役割を担っており、教員と事務職員で構成されています。

委員会では、企画委員と複数学部から参加した学生が4グループごとに別れ、オンラインホワイトボードツール「Stormboard」を用いて、「①学習や授業に対する困りごと・要望・希望」「②①の意見を基に「こんな研修会があればよい」というアイデア」について意見を出し合いました。意見交換では、「大人数授業で学ぶ意欲を維持する難しさ」「シラバスが専門的な表現で書かれており、授業の魅力や教員の思いが伝わりにくい」「学生自身の成長や到達度が見えにくい」「授業の実態を事前を知るための情報が不足している」など、多様な視点から率直な意見が挙がりました。一方で、「授業内容の理解を深めるには、丁寧な解説動画や補足資料が役立つ」「学部を越えた学びの面白さに気づく機会がもっとあるとよい」といった意見も共有され、学生が日頃どのように学び、何に価値を感じているのかを教職員が知る良い機会となりました。その後、企画委員と学生に分かれ、企画委員は意見交換会の内容共有や今後の検討を行い、学生は「もし自分たちが全学FD/SD研修会を企画するならば」というテーマで、仮の研修会テーマと概要を大まかに企画する短時間のワークを行いました。最後に、学生からワークの内容について発表があり、大きく2点の提案がありました。

1つ目は、「シラバス」と「授業の魅力」とのギャップを可視化する研修会です。学生から「教員の思い・面白さがシラバスに載り切れていない」という問題意識が示され、シラバスの記述内容と授業の魅力とのずれを学生の視点から確認し、シラバスの表現改善や受講後の「想像と違った」といった状況を減らすことを目的とした研修案が提案されました。教員にとっては、学生の関心ポイントを理解する機会となり、シラバス改善のヒントになるのではないかと、この意見がありました。2つ目は、学生目線の「学びの掲示板」を構築する案です。学生は、シラバスが普遍的・専門用語が中心の表現になりがちで、履修登録の際に自分に合った学びをイメージしにくいと共有しました。これに対し「この授業はこういう学生に向いている」「他学部生が受講するとこういう学びが得られる」といった学生コメントを集約し、学部や学年などで絞り込んで閲覧する掲示板を構築することで、履修登録時に授業の特徴を具体的にイメージしやすくなるのではないかと、また教員にとっても授業改善の参考情報として活用できるのではないかと提案がありました。

最後に、企画委員長であり教育支援研究開発センター副センター長の三田 貴 教授(国際関係学部)から、「学生が全学FD/SD研修会の企画段階から参画する取り組みは、本学の特徴にもなり得る。今後の全学FD/SD研修会をどのように活かすか、継続して検討したい」と締めくくりました。



アカデミックスキルセミナー「アカデミックスキルって何？」開催



12月10日(水)、本学教育支援研究開発センター長であり、生命科学部の佐藤 賢一 教授を講師に、教職員・学生を対象としたアカデミックスキルセミナー「アカデミックスキルって何？」を学生コモンズで開催しました。セミナーでは佐藤教授が翻訳を担当したザカリー・ショア著「大学での学びをハックする」を取り上げ、同書で提示されている読む・書く・話す・活動する・研究するという、大学での学びに関わる5つのスキルの概要を紹介しました。あわせて、「読むスキル」では主張とその根拠を短時間で把握する読み方、「書くスキル」では結論を早い段階で示し、そのエビデンスを示していく文章構成の考え方、「話すスキル」では聞き手を引き込み、学びにつながる内容を提供することなどについて説明がありました。後半は、「アクティブ・ブック・ダイアログ(Active Book Dialogue)」を用いて、同書第1章(読むスキルに関する章)の一部を使った読書ワークを実施しました。参加者は章の該当箇所を分担して読み、感想ではなく「事実として何が書かれているか」に焦点を当てて内容を自分の言葉で要約し、配布された用紙に記入しました。その後、要約した用紙を章のページ順に並べ、順番に内容を発表し合うことで、章全体の構成の流れを確認しました。佐藤先生から、「発表後は魔法のように、面白いほど話が繋がります。」と聞いていたため、参加者から「なるほど」と納得の声があがりました。最後に佐藤先生からのまとめとして、生命科学分野の論文を例に、論文のタイトルやアブストラクト、考察部分などを手がかりに主張と根拠を把握していく読み方が紹介され、本セミナーで扱った「読むスキル」の考え方が、学部・大学院での学習や研究にどのように応用できるかについて説明がありました。

大学教育学会に参加・発表しました！

— 教員・職員がともに参加・発表した2025年度の取り組み —

2025年度は、教員と職員と一緒に大学教育学会に参加し、春(第47回大会・口頭発表)と秋(課題研究集会・ポスター発表)で、それぞれの成果を発表しました。学会は、日頃の取り組みを発表するだけでなく、最新の教育の工夫や他大学の活動を知り、交流することで新しい視点を得ることも大切な目的となっています。

春

「教員・職員によるFD/SDの取り組みと学生ファシリテータの成長」 (第47回大会・口頭発表)



春の大会では、教員と職員が協力して進めてきたFD/SD(教職員の学びや成長を支える活動)の実践について発表しました。企画委員会のメンバーを対象にアンケートを行い、委員の役割や意識の変化、組織のニーズの理解、教員同士の情報共有が進んだことなどを調査しました。一方で、学生が活動に参加することや、職員の学びをさらに深めること、得た知識を現場で活かすことなど、今後の課題も見えてきました。

また、2024年秋から2025年春にかけては、学生ファシリテータ(学ファシ)の活動を通じて、学生がどれだけ成長を感じているかを調べました。活動の前後でどんな変化があったかや、活動に満足できたかなどを多角的に調査し、学ファシの経験が学生の成長にどう役立っているかを検証しました。

秋

「学ファシの成長の追跡とLINKの成長の調べ方を考える取り組み」 (課題研究集会・ポスター発表)



秋の課題研究集会では、春から秋までの学ファシの活動を追いかけて、どんな成長や気づきが合ったかを続編として報告しました。活動を通じて、「人との関わり方の難しさ」「楽しむことの大切さ」「距離感の取り方」「先輩の行動を見て学ぶこと」「チームや自分を大切にしている意識」など、さまざまな学びや課題が見えてきました。これらの成果は、授業運営支援やイベントなどの活動が学生の成長や意欲向上に役立っていることを示します。

一方、グローバルcommons(GC)で活動する学生ボランティア(LINK)については、学ファシの取り組みを参考にしながら、活動に積極的に関わることでどんな成長があるかを探り、その結果を発表しました。現在は、成長や国際的な力がどれだけ身につくかを調べる方法を検討し始めた段階であり、今後はより具体的な調査やインタビューを通じて、成長や課題を明らかにしていく予定です。

学会参加の意義と今後の展望

学会は、教員・職員がともに発表することで現場のさまざまな知見や課題を共有し、教育コミュニティの活性化につながっています。今後はセンターとして、学生が学会発表やさまざまな活動に参加し、自分の学びや成果を発信できる機会を広げていけるよう、知識や経験を身につけるサポートを進めていきます。こうした取り組みを通じて、教職員と学生が協力し合い、教育の質の改善につなげていくことを目指します。

またセンターとして、授業やイベントなどを通じて学生の成長や変化をわかりやすく伝える取り組みも継続していきます。学ファシやLINKなどの活動で得られた成果や気づきについては、今後も学会発表や情報発信を通じて、学内外で知見を共有し、他大学の方々と積極的に議論を深めていきます。こうした交流を通じて、学生の成長支援や教育の向上に貢献できるよう努めていきます。